

電車

sanukisoba

ドアが閉まる。空気音とともに僕のいる動き出した空間と、そこにとどまり続ける空間をドアが隔てた。ガラス一枚ほどの厚みしか持たない物体が、それまでひとつだった空間をふたつに分ける。それはどこか不思議で、そしてものすごく日常的な光景だ。

7人がけシートの真ん中に腰を下ろしている僕の前には、スーツ姿の男性が座っている。彼は左側に黒いカバンを置いて右手で携帯を操作している。携帯電話で何をしているのか、僕にはわからない。左を向けば髪が長い若い服装をした女性が座っているシルバーシートが見える。右には僕の座っているのと同じ7人がけのシートがひとつ、その先にはまたシートが並んでいる。いつもと同じ、何の変哲もない都市圏を走る電車の車内。

電車はホームを離れ、徐々に速度を上げていく。

前に座っている男性はもしかしたら携帯のメールやアドレスの整理をしているのかもしれない。そう考えたとき、僕の頭には「自殺」という単語が浮かんだ。彼は死んだあとで他の人に迷惑をかけないように、遺族に自分の恥ずかしい記録を残さないために、メールやアドレスを処分しているのだ。くたびれた革靴、年季の入ったネクタイ、買ってきたばかりのようにまばゆく白いワイシャツ、そして表情のない顔からは「自殺」という結論以外見えてこない。

僕はそのまま彼を見送っていいのだろうか。彼は次の駅できっと降りて、ホームのベンチに腰を下ろすだろう。ベンチに腰を下ろす前に飲み物を買うかもしれない。もちろん自販機ではなく売店で。買う飲み物は炭酸飲料。ベンチに座り、向かいのホームを眺めながらゆっくりと炭酸飲料を飲む。飲み終わるまでに2本ほど電車をやり過ごす。

空き缶を自販機横のくずかごに捨てた彼は再びベンチに戻り、何かを確認するようにカバンを開き、その中に携帯電話を入れる。通過電車に気をつける旨のアナウンスが流れ、保安用のランプがつき、微かに電車の音が聞こえ始めた頃、彼はバッグをベンチに残したままホームの白線の上に立つ。

微かな音が轟音に変わり車体がホームの端に姿を現す。ホームに立つものにとって電車が電車ではなく高速で移動する鉄の塊になったとき、彼は最後の跳躍をする。着地したことに本人が気づくことのない、永遠の跳躍を彼は成し遂げる。

人々は叫び、鉄の塊は悲鳴を上げる。しかしそれらは誰も記録したことのないほどの跳躍をした彼を讃える叫びでも悲鳴でもない。日常を逸脱した出来事に対する恐怖と興奮の叫びであり、悲鳴である。すべては騒がしさに包まれ、日常を逸脱した出来事が日常そのものを壊す。

すべてが叫びも悲鳴もない日常の姿に戻る頃、彼が残した記録が輝きを失う。命をかけた記録は同情や想像によって、汚された記録となる。

彼は携帯電話の記録をどんなにきれいに削除しても、最後の跳躍によって辱められる。ならばいっそ跳ばないほうがよかっただろうに。

電車は緩いカーブを通過する。

女性は金属の手すりにもたれかかったまま動かない。寝ているのだろうか、起きているのだろうか。着ていないに等しいほど短いミニスカートから伸びる白い足は昼間の電車には似つかわしくないように思えた。

僕が足を組んだとき、彼女は頭を上げた。服装相応の年齢に見えるその女性は、髪をかきあげ、耳をあらわにした。挑発的なスカートに対し「バランスをとるかのようにストイックな上着のしわを伸ばすように引っ張ってから、鏡をハンドバッグから取り出し、化粧を確認し始める。

電車は相変わらず従順に走り続けている。単調な音を立てながら。

彼女も恐らく次の駅で降りる。売店で飲み物を買っている男性の脇を通り過ぎ、エスカレーターに乗り改札へ向かう。周りがあるものに注意を払うことは一切ない。バッグから定期券を取り出し、改札を抜ける。北口の階段を降りて駅前の雑居ビルの一階にあるバイト先へ足をを進める。

彼女は女子大生で、全国チェーンのコーヒーショップでバイトをしている。本当は夕方からの勤務なのに、一人休みの子が出たという理由で急遽呼び出されたのだ。

バイト先に着くと店長が事情を説明し、急なシフトの侘びと出勤してくれたことに対する礼を述べる。事務的ではなく心からの侘びと礼、店長はいつも誠実で丁寧な人だ。だからこそ彼女もこのバイトを2年間も続けている。

彼女が更衣室で着替えていると、パトカーと救急車のサイレンが聞こえた。すぐ近くで止まったのはわかったが、それがどこなのかは換気用の窓しかない更衣室からはわからない。

更衣室から出ると、店長が人身事故のあったことを彼女に伝える。電車が不通になっていて、客が増えそうだから頑張ると店長は言うはずだ。彼女は素直に店長のアドバイスどおり客が増えることを見越した準備をする。店長は誠実で丁寧な上に的確なアドバイスをいつも行うはずだ。そして店長の言うとおりの客はいつもの倍以上となる。

彼女を含めショップの店員はいつも以上の売り上げを喜びと同時に、喜びを抱いたことで死者に対して少し申し訳なさを感じる。しかしそれもほんのひと時のことで、店はいつもどおりの営業を続け、毎日と同じ時刻に閉店し彼女は帰路に着く。家では母親が待っていて、バイトで疲れた彼女のために暖かい紅茶を淹れる。紅茶を淹れることも、その紅茶の味も、いつもと同じだ。

風呂を出てから見たニュースで彼女は事故の詳細を知るが、彼女が男性の残した記録を知ることは決していない。

電車は減速を始め、流れていった空間が僕のいる空間と同調していく。ホームに着き、ふたつの空間をひとつに戻す空気音とともに、新しい仲間が僕のいる空間に足を踏み入れた。

男性は電車を降りることなく相変わらず携帯を操作している。彼女はいつの間にか鏡をしまっていて、文庫本に目を落としていた。

記録が作られることはなかったし、彼女がコーヒーショップに行くこともなかった。それはきっとふたつの空間がひとつになってしまったからで、そのまま僕のいる空間が僕のいる空間であり続けたら、記録は作られ、コーヒーショップは売り上げを伸ばしただろう。

僕は少し残念な気がした。